法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-06-24

思い出 : 秋期文学散歩の感想など

谷田, ちひろ

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
51
(開始ページ / Start Page)
178
(終了ページ / End Page)
180
(発行年 / Year)
1995-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019826

おくり　そして　むかえる

卒業します

卒業を迎えるにあたって

佐野　直美

平成三年四月、不安と希望を抱えながら入学してからはや四年。あっという間のことでした。ぶじに卒論も提出し、この原稿を皆さんが手にしている頃には、私は既に卒業していることと思います。

私は万葉集を学びたいと思い、日本文学科に入り、そして坂本ゼミの一期生として二年間学んできました。最初の頃は、班発表をこなすことで精一杯であり、万葉集を理解・楽しむことができませんでした。しかし、無知な私も坂本先生の指導のおかげで、次第に万葉集に慣れ親しみ、万葉集の楽しみが少しわかった気がします。まだまだ学びたいことも多いのですが卒業です。三年生の方にもこの様な楽しみを見つけ、万葉集を心から好きになってもらいたいと思っています。ゼミの三・四年生、坂本勝先生、そして、法政大学、今まで本当に本当にありがとうございました。

（坂本ゼミ　一部　四年）

思い出

秋期文学散歩の感想など

谷田ちひろ

その日は朝から雨だった。朝から運が悪いなと思った。これから品川駅に行って京浜急行に乗らねばならない。

一人で行くのも詰らないので、杉本教授が乗るという十二時十分発の電車に乗ろうとして遅れ、結局一人で行った。改札を出た所で、或団体が、一種異様な雰囲気を放っていた。これが噂の国文学会である。

そこで勝又教授に捕まったのが運のツキで、この様なモノを書かされる羽目になった。この日は運が悪かった。これで三度目だ。大体私はテストと論文と感想文、凡そ論述と云われるものは大嫌いである。

ところへ、杉本教授が御登場。授業で公言していたのにも拘らず自ら遅刻なさるとは

先生方の言葉

歓迎・新入生

香川　良成

私は二つの大学生活を経験しています。一つはやむなく行くことになった大学ですが、そこで様々な個性（他者）に出会ったことを今も懐かしく思い出します。法政は編入でしたが、これは日本文学科の学風（先生たち）を選択しての編入でした。勿論ここでも良き友人たちにめぐり会えました。

今振り返ってみると、いずれの場合にも、類は友を呼ぶのたとえのごとく、自ら求めるものがあれば、そこにひとつのグループやサークルや集まりが自然と出来上っていったように思います。そこから得た収穫は大きいものでした。

新入生の皆さんは、それぞれに夢や希望を持って入学してきたにちがいありませんが、それを積極的にお互にぶっつけ合って、グループやサークルや集まりなどの交流の輪をどんどん拡げていくことを期待します。教室での活発な意見の発表もこの輪を拡げます。多くの個性（他者）と出会え、しかも何の気兼ねなく甲論乙駁論議出来るということ、これは学生生活の特権だとつくづく思います。他者の発見は自己の検証・発展にもつながります。

この絶好の機会をどうか最大限に生かして下さい。そうすれば卒業時のあなたたちは、きっと大地にどっかりと腰を据えて突っ立っていることでしょう。新しい時代はあなたたちが創って行くのです。

（文学部講師）

……。あの瓢々とした感じが皆にウケている理由なのだろうか。

行き先は、「金沢文庫」という名の博物館である。この時は「兼好と徒然草」展をやっていた。博物館の癖に称名寺という寺の境内の奥にあり、閉鎖的な感じで中々面白い。寺そのものが展示物のようでもある。有難みは無かった。

一般でも安いが、団体なので更に安く、しかも国文学会の関係から、学芸員の方のガイド付きという、中々オイシイ見学会であった。

展示物の中に、美術史の授業で見たばかりの掛軸があり、「おお、こんな所で会えるとは」と旧友に会った様な心持ちがした。

展示は、絵本が多かった。見ていて楽しい。徒然草は、絵本向きの文章なのかとつくづく感じた。何より昔の絵本はやたらに細かい。これで凸版印刷とは信じられん。現代でも、絵本は文庫本などよりずっと高価だから、当時は屹度相当したに違いない。

一通り見て回ると、先生方はもう既に一服していた。我々が遅いのか、先生方が早いのか、良く分らない。

帰りがけに、飲み会なんだか食事会なんだか良く分らないものをしている内に流れ解散

となったが、全員一緒に帰ったようである。

国文学会の文学散歩は、教授やOB・院生の方々など、様々な人が参加しているが、学生は殆どいない。先生方はそれが悩みの種であるようだが、それはそれで別に良いと思う。

皆さん和気あいあいとやってるようだし、先生方と御友達になる機会も増える。普通、学生は先生と話したくもないらしいが、授業では一寸見られないような姿が見られるので中々楽しいこともある。どんな姿かは秘密である。諸君もそんな楽しい経験がしたかったら参加し給え。泥沼的にハマッてしまうこと受け合いである。

(二部　三年)

ノンジャンル

横道　蘭

TRFノリの女の子が、ボックスで久宝留理子を歌った後突然「越冬つばめ」を熱唱したりする――それって別に普通のことだ。一人の人間の中には自分でも信じられないぐらいの顔が潜んでいるのだから。でも普通の生活を振り返ってみると、意外に狭い範囲にしか自分を置いてなかったりするんじゃないか。会う友達もいく店も結構いつも一緒だったりして。

知らない自分を知るのはちょっと恐いかもしれない。でも知らなかった世界に触れたとき、意外な自分を発見して今までより素敵な自分になれることだってある。そしてこの世の中にはまだ経験したことのないことがたっぷり転がっている。いつかはこの世から去る運命ならば、できるだけ食べたほうが得だ、それがまずかったら次にパスすりゃいいんだから。

メタル系しか聞かない奴、ハウス物も結構イケるよ、懐かしいカバーがあったりして。アコースティックにこだわる奴、たまに打ち込み物聞いてごらん、意外なフレーズ盗めるかも。シネスク・シネヴィバン系の映画ばかり見てる人、SFXだって面白いのあるのに。テレビドラマにはまってる人、シアタートップスにも行ってみたら、ライブの舞台は迫力が違うはず。

ぼぉぉっとしていると、四年間なんてすぐ過ぎてしまう。ちょっとハードでもメチャメチャ忙しいくらいに見て・聞いて・食べて・行って・歌って・触れて・読んで・踊って…、そうした方がぜったい充実すると思う――ノンジャンルで。

(文学部講師)